

新収蔵品展

Exhibition of New Collections

2023.4.11 (火)-6.25 (日)

会場：古美術企画展示室

2022年度に寄贈や購入によって新たに収蔵された古美術作品をお披露目します。



〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051

出品リスト

※作品データは、出品番号、作品名、作者、時代、材質、サイズ(cm)、寄贈者名またはコレクション名、作品解説の順で記載しています。いずれも該当するデータがない場合は省略しています。

寄 贈

1 松樹下草庵図

川喜田半泥子（1878-1963）
昭和10年（1935）代
紙本墨画
縦114.8 横31.7
2023年古館九一氏遺贈

2 『隨筆 泥佛堂日録』

川喜田半泥子（1878-1963）
昭和12年（1937）
紙本印刷
縦23.5 横16.5
2023年古館九一氏遺贈

かわ き た はんてい し
川喜田半泥子（本名：久太夫政令）は、三重県津市の出身。百五銀行の頭取のほか数々の企業の要職を務めて財界で活躍する傍ら、陶芸や書画をはじめとする多彩な芸術分野に才能を発揮しました。

画面手前に松、奥に草庵をあらわした《松樹下草庵図》（作品1）は、半泥子の自邸である千歳山荘内の風景を描いたものです。邸内には泥佛堂という輦轤場を構えており、本作はこの泥佛堂を描いているのかもしれません。

また、本作には「室池の月うちくだき物洗ふ」という半泥子自作の句が記されていますが、この句は昭和10年（1935）に発行された俳句雑誌にも掲載されています。従って、本作が制作されたのは昭和10年からさほど時を経ない時期であったと考えてよいでしょう。

ふるたちくいち
本作をかつて所蔵していた古館九一氏（1874-1949）は、唐津出身の実業家、愛陶家です。杵島炭鉱の専務取締役を昭和5年（1930）に退職した後、古唐津の古窯跡の発掘を支援したり、蒐集品を自邸に展示するなど、調査研究に情熱を傾けました。

九一氏が会社を辞した昭和5年前後は、桃山時代の古窯跡の発掘ブームが起こっており、多くの愛陶家、陶芸家たちが古唐津を求めて彼の邸宅を訪れました。半泥子もその一人で、昭和11年に九一氏の邸宅を訪れ蒐集品を眼にした際の様子を自著『隨筆 泥佛堂日録』（作品2）に次のように記しています。

—古館さんの唐津蒐集

古館さんの唐津系統の蒐集は、得難いものである。伝世品と、発掘とを問わず、唐津系のものはよくも普遍的に集められている。そして客の言葉に応じて、取出される様子から見て、整理の上にも心をさせられる。然もそれが、例のお金臭い集めかたでなく、全くの愛陶趣味から来ているから、破片の如きも一小片に至るまで、出所を明記して研究の便にする深切が現れている。吳々も市場価値を度外した蒐集が嬉しい。世の愛陶家諸君は、古館さんの質実さと、陶片に対する深切さに見倣われたい。

九一氏が蒐集した古唐津を体系的に整理分類していたこと、また、それらを訪れた人に公開し研究に役立てていたことが良くわかります。ちなみに**作品2**の見返しには、昭和13年（1938）に還暦を迎えた半泥子が本書を贈った旨が記されています。昭和11年に半泥子が九一氏の邸宅を訪れて以降も、両者の交友が継続していたことを示す点でも貴重です。

購入

3 日課観音図

酒井抱一（1761－1828）
江戸時代 文政7年（1824）
絹本着色
縦71.7 横24.4

参考出品

4 日課観音図

伝・源実朝（1192－1219）
鎌倉時代 13世紀
紙本着色
縦21.0 横14.6
松永コレクション

日課観音とは、仏道修行の一環として一日一図描かれた観音のこと。紙と墨さえあれば制作が可能で、造寺造仏などに比べるとはるかに簡便な素材・技法で実現できるので、個人的な祈願に相応しい善事といえます。

作品3は、江戸琳派を代表する絵師である酒井抱一（1761－1828）の手によるもので、「文政七年甲申五月日課三十三幅之一」という印章から、文政7年（1824）の5月から6月にかけての33日間、1日1幅ずつ描かれたと分かります。

同様の印章を伴う作品は複数点知られており、「二日」と記された本作は5月2日の制作と判断できます。本展では、**作品3**の関連作品として、松永耳庵旧蔵の**伝・源実朝《日課観音図》(作品4)**も展示していますが、2つの日課観音には単に主題が同じというだけではない、密接なつながりがあります。

作品4を収める木箱の蓋には「権大僧都抱一上人御蔵…」と記されており、ある時期に酒井抱一が所蔵していたようで、**作品3**はこの**作品4**をもとに描かれたと考えられます。両作品を比べてみると、白衣を頭か

ら被って座る姿はもちろん、線の構成までかなり近いことに気が付きます。

ですが、衣を縁取る線の質にはかなりの違いがあります。実朝の日課観音（**作品4**）は、肥瘦（一筆の線の中での太い細い）がほとんどない穏やかな筆遣いで衣の線を描きます。一方、抱一の日課観音（**作品3**）の場合、書道を思わせる強い打ち込みや肥瘦に富んだ線が用いられています。こうした力強い筆遣いから、抱一が本図の制作にかけた思いを読み取ることもできるかもしれません。

なお、**作品4**には作品を収める木箱の他にも様々な資料が一緒に伝わっており、これらを元に抱一が**作品4**を入手した当時の動向を明らかにすることが、先学によって試みられています。（岩永悦子「酒井抱一旧蔵 伝・源実朝筆《日課観音図をめぐって》」『福岡市美術館研究紀要』第9号、2021年。この論文は当館HPから閲覧可能です。）

それによると、抱一が伝・実朝筆の日課観音（**作品4**）を入手したのは、文政6年（1823）の可能性が高いといいます。そして、抱一自身が日課観音（**作品3**）を描くのは、その翌年の5月から6月にかけてのことなのですが、これは抱一が敬慕していた尾形光琳（1658－1716）、乾山（1663－1743）が亡くなったのが6月2日であることに関係するようです。すなわち、5月1日から1日1幅ずつ描いていくと、光琳、乾山の祥月命日に近い時期に33幅を書き上げることが出来るのです。抱一は光琳、乾山の追善、顕彰活動を熱心に行っており、**作品3**の制作もその一環であったと考えられています。

（学芸員 宮田太樹）